

# 春の夜

芥川龍之介

青空文庫



これは近頃Nさんと云う看護婦に聞いた話である。Nさんは中々利きかぬ氣らしい。いつも乾いた唇くちびるのかけに鋭い犬齒けんしの見える人である。

僕は当時僕の弟の転地先の宿屋の二階に大腸加答兒だいちようかたるを起して横よこになつていた。下痢げりは一週間たつてもとまる氣色けしきは無い。そこで元来は弟のためにそこに来ていたNさんに厄介やっかいをかけることになつたのである。

ある五月雨さみだれのふり続いた午後、Nさんは雪平ゆきひらに粥かゆを煮ながら、いかにも無造作むぞうさにその話をした。

×

×

×

ある年の春、Nさんはある看護婦会から牛込の野田と云う家へ行くことになった。野田と云う家には男主人はいない。切り髪にした女隠居が一人、嫁入り前の娘が一人、そのまた娘の弟が一人、——あとは女中のいるばかりである。Nさんはこの家へ行つた時、何か妙に気の滅入るのを感じた。それは一つには姉も弟も肺結核に罹つていたためであろう。けれどもまた一つには四畳半の離れの抱えこんだ、飛び石一つ打つてない庭に木賊ばかり茂つていたためである。実際その夥しい木賊はNさんの言葉に

従えば、「胡麻竹ごまだけを打った濡れ縁ぬさえ突き上げるように」茂つていた。

女隠居は娘を雪ゆきさんと呼び、息子むすこだけは清太郎せいたろうと呼び捨てにしていた。雪さんは気の勝った女だったと見え、熱の高低を計はかるのにさえ、Nさんの見たのでは承知せず一々検温器を透すかして見たそうである。清太郎は雪さんとは反対にNさんに世話を焼かせたことはない。何なんでも言うなりになるばかりか、Nさんにもものを言う時には顔を赤めたりするくらいである。女隠居はこう云う清太郎よりも雪さんを大事にしていたらしい。その癖病気の重いのは雪さんよりもむしろ清太郎だった。

「あたしはそんな意気地いくじなしに育てた覚えはないんだがね。」

女隠居は離れへ来る度に（清太郎は離れに床に就とこっていた。）

いつもつけつけと口小言くちこごとを言った。が、二十一になる清太郎は滅多めったに口答えもしたこともない。ただ仰向けあおもむになつたまま、たいていはじつと目を閉じている。そのまた顔も透すきとおるように白い。Nさんは氷ひょう囊のうを取り換えながら、時々その頬ほおのあたりに庭一ぱいの木賊とくさの影うつつが映るように感じたと言いうことである。

ある晩の十時前まえに、Nさんはこの家うちから二三町離れた、灯ひの多い町へ氷を買いに行った。その帰りに人通りの少ない屋敷続きの登り坂へかかると、誰か一人ひとりぶらさがるように後ろからNさんに抱だきついたものがある。Nさんは勿論びつくりした。が、その上にも驚おどいたことには思おもわずたじたとになりながら、肩越しに相手

をふり返ると、闇の中にもちらりと見えた顔が清太郎と少しも変らないことである。いや、変らないのは顔ばかりではない。五分刈りに刈った頭でも、紺飛白らしい着物でも、ほとんど清太郎とそっくりである。しかしおとといも喀血した患者の清太郎が出て来るはずはない。況やそんな真似をしたりするはずはない。「姐さん、お金をおくれよう。」

その少年はやはり抱きついたまま、甘えるようにこう声をかけた。その声もまた不思議にも清太郎の声ではないかと思うくらいである。気丈なNさんは左の手にしつかり相手の手を抑えながら、「何です、失礼な。あたしはこの屋敷のものですから、そんなことをおしなされると、門番の爺やさん呼びますよ」と言った。

けれども相手は不相変あいかわらず。「お金をおくれよう」を繰り返している。Nさんはじりじり引き戻されながら、もう一度この少年をふり返った。今度もまた相手の目鼻立ちは確かに「はにかみや」の清太郎である。Nさんは急に無気味ぶきみになり、抑えていた手を緩めゆるずに出来るだけ大きい声を出した。

「爺やさん、来て下さい！」

相手はNさんの声と一しよに、抑えられていた手を振りもぎろうとした。同時にまたNさんも左の手を離れた。それから相手はよろよろする間まに一生懸命に走り出した。

Nさんは息を切らせながら、あと（後になつて気がついて見ると、  
風呂敷ふろしきに包んだ何斤なんぎんかの氷をしつかり胸に当てていたそうであ

る。）野田の家の玄関へ走りこんだ。家の中は勿論ひっそりしている。Nさんは茶の間へ顔を出しながら、夕刊をひろげていた女隠居にちよつと間の悪い思いをした。

「Nさん、あなた、どうなすつた？」

女隠居はNさんを見ると、ほとんど詰るなじようにこつ言つた。それは何もけたたましい足音に驚いたためばかりではない。実際またNさんは笑つてはいても、体の震えるふるのは止まとらなかつたからである。

「いえ、今その坂へ来ると、いたずらをした人があつたものですから、……」

「あなたに？」

「ええ、後うしろからかじりついて、『姐ねえさん、お金をおくれよう』つて言つて、……」

「ああ、そう言えばこの界かい限わいには小堀こぼりとか云う不良少年があつてね、……」

すると次の間まから声をかけたのはやはり床とこについている雪さんである。しかもそれはNさんには勿もちろん論、女隠居にも意外だったらしい、妙けんに険のある言葉だった。

「お母かあさま様、少し静かにして頂ちようだい戴だい。」

Nさんはこう云う雪さんの言葉に軽い反感——と云うよりもむしろ侮蔑ぶべつを感じながら、その機会に茶の間まを立つて行つた。が、清太郎に似た不良少年の顔は未だいまに目の前に残っている。いや、

不良少年の顔ではない。ただどこか輪郭りんかくのぼやけた清太郎自身の顔である。

五分ばかりたった後のち、Nさんはまた濡れ縁ぬえんをまわり、離れへ氷ひようのう囊ふくろを運んで行った。清太郎はそこにいないかも知れない、少くとも死んでいるのではないか？——そんな気もNさんにはしないではなかった。が、離れへ行つて見ると、清太郎は薄暗い電燈の下したに静かにひとり眠っている。顔もまた不相変あいかわらず透きとおるように白い。ちょうど庭に一ぱいに伸びた木賊とくさの影の映うつっているように。

「氷囊をお取り換え致しましょう。」

Nさんはこう言いかけながら、後ろが気になってならなかった。

×

僕はこの話の終わった時、Nさんの顔を眺めたまま多少悪意のある言葉を出した。

×

「清太郎？——ですね。あなたはその人が好きだったんでしよう？」

×

「ええ、好きでございました。」

Nさんは僕の予想したよりも遥かにさつぱり<sup>はる</sup>と返事をした。

(大正十五年八月十二日)





# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年2月1日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 春の夜

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>